砂書房版『松本清張研究』奮闘記

田中伸和

砂書房より、研究誌『松本清張研究』創刊号を刊行したのは、平成八（一九九六）年九月であった。平成四年に松本清張が亡くなってから四年が経っていた。

松本清張の作品については、生前から国文学雑誌に特集を組まれたことはあるが、ほとんどは内容紹介程度で、掲載の論文も一般論が大勢をしめていた。〈脱領域の文学〉と大きなテーマを掲げているわりには、本格的な論は皆無に等しかったように思う。

そのような状況だったので、近代文学系の出版社でも、松本清張の研究誌など、営業面を考えれば出せるはずもなかった。有名作家の愛読者を対象とした読み物雑誌ならともかく、純然たる研究誌などは。

それは、小さな出版社ゆえに出来た冒険かもしれなかった。しかし、その無謀な雑誌を出すにあたり、実際に企画書を書く段になると、さすがに私も最後の一歩はなかなか踏み出せなかった。多くの清張関係の資料を机上に山積みにして読破しながら、悩みに悩んだ。そして、私にその一歩を踏み出させたのは、圧倒的なまでの清張文学の魅力であった。

企画書を書くうえで、二つのことで私は苦しんだ。その第一は、当然のことながら、この雑誌がどの程度営業面でなりたつかという現実的な問題。第二は、〈脱領域の文学〉といわれる清張文学が、はたして現行の文学史や研究の俎上にのるものなのか、値するものなのか、ということであった。

＊

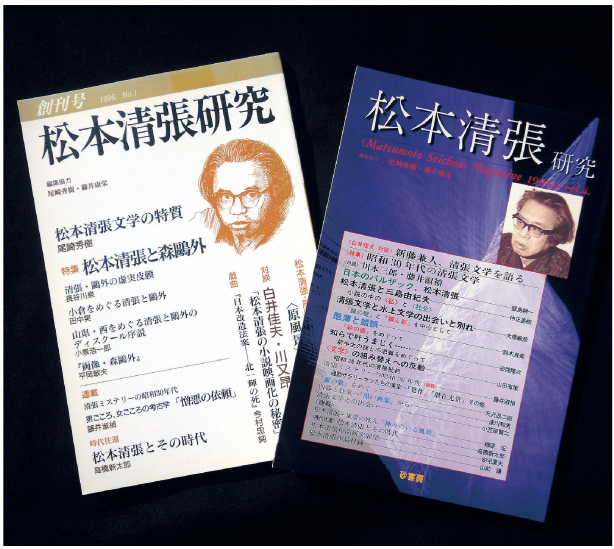
本題に入る前に、そもそもなぜ清張の研究誌などを目指したのか、そこに至るまでの経路を明らかにするためにも、清張作品と私とのかかわりについて少し記しておこう。

私は、生前の松本清張にお会いしたことはない。しかし、これまでの人生の途上で何度となく作品とのかかわりを持つことがあった。思えば不思議なめぐり合わせである。私が無謀にも研究誌を出そうとした下地がそこにあるようにも思えてくるのである。

私は、二十代の頃、福岡県の私立の高校に勤めていた。当時もすでに、クラブ活動は運動部に人気が集中していた。それに比べて私の創設(?)した文芸部に入る生徒はきわめて少ない。その数名の生徒たちを連れて文学散歩に、森鷗外や林芙美子の名作の舞台を訪ね歩いた。その頃——昭和四十年代の頃は、鹿児島本線折尾駅などに降りると、空が煤けて見え、石炭の匂いがしたものであった。森鷗外の関係では、清張の『或る「小倉日記」伝』の文庫を持って、風の吹く小倉の街を生徒たちと徘徊したことが、今も昨日のように蘇ってくる。

ある時、駅前の小さな書店で松本清張全集のB5版の小さなチラシを見つけた。問題児も多く、閉鎖され抑圧された学校の生活のなかでは、全集を読むことがずいぶん救いとなった。また、それは、外の世界へのあこがれとなった。魂をゆさぶられる思いで、夢中で全集を読破していった。

もちろん私は、それ以前から清張作品に親しんではいた。当時朝日新聞社で『週刊朝日』の編集部にいた伯父から、週刊誌が実家に送られて来ていたので、中、高時代から



「黒い画集」などの一連のシリーズには馴染んでいたし、父の本棚の清張の単行本やカッパブックスをそれとなく読んでいた。ちょうど、昭和三十年代、思えば清張の全盛期と符合していた。

教師時代に話を戻すと、その頃、私は博多と北九州のほぼ中間の地域に住んでいたので、清張作品に出てくる地名が間近にあり、ある作品では、下宿の前の路を犯人とおぼしき男が通ってゆく場面もあって、高鳴る胸をおさえかねる程であった。青春の光と影というのであろうか――私は若気の至りで、文学にあこがれ上京を決意することになる。

しかし、上京してみると、なぜか東京の土地になじむことが出来ない。しかたなく、清張作品などを手掛りに、都内狭しとアパート探しに駆けまわることになり、その結果、下町を除く都内の地図を熟知することにもなったりした。東京での食うや食わずの生活がはじまった。

苦しい生活の中で、清張作品は私の心の糧になったことは確かで、それまでは空想の世界にあった〈文学〉から、現実を直視する勇気を学ぶことにもなった。様々な職に就いたが、とりわけ小さな印刷会社にいた時は、清張の若い時代、石版印刷所に勤めていた頃を彷彿とさせるものがあり、印刷関係にかかわる作品は身近なものとなった。同時に清張の苦労を思った。

四十代になると私は東横線・田園調布駅近くの編集プロダクションに勤めるようになった。私が近代文学に詳しいことから、新しい企画の『日本文芸鑑賞事典』（ぎょうせい）という全二〇巻にも及ぶ厖大な事典の編集にうってつけだったので、即入社となったのだった。この事典により、明治から現在に到る文学作品をあらためて学ぶことになった。そして一部の作家たちや多くの文芸評論家・大学の先生方との出会いがあった。

十年ほど勤めているうちに時代は変わり、バブルがはじけると、この下請会社はあっけなく倒産してしまった。その倒産劇は凄まじいものであった。困り果てたが、何とか小さな出版社に職を得ることが出来た。その出版社こそ、研究誌『松本清張研究』を出すことになる砂書房である。

砂書房は、当時は地下鉄丸ノ内線・本郷三丁目駅から東大赤門のほうに徒歩で五分ほどのところにあった。四畳半一間のワンルームマンションで、社長と社長の奥さん、それに雑務担当の青年の三人という超小型所帯には、さすがに私も驚いたが、もっとも、社長、編集者、営業をすべて一人でこなす出版社もない訳ではない。

私が入社して、すぐに社長が病気で亡くなり、奥さんが

社長のイスに座ることになった。砂書房は、もともと歯科専門の医学書を刊行する出版社であったが（本郷には医学関係の出版社が多い）、女社長が人文関係の出版に意欲を示したので、年齢のいった私を社員として雇ってくれたのである。女社長、吉田三根氏は、六本木の某通信社に勤めていたことのある人で、苦労の多い人生を生きてきたわりに楽天的な一面もあった。性格は気の強い人で、時折私とぶつかることもあった。

砂書房のような小さな出版社では、編集者は、企画から原稿依頼、編集、そして営業（書店まわり）まで一人でこなさなければならない。意欲さえあれば、大手出版社に負けない本も創ることができるのだが……。いくら良い本を創っても、本が売れないことには成り立たないし、そうでなければ会社は潰れてしまう。問題は、いかにして本を売るかということになる。

何といっても、資本力のある大手出版社のような大きな広告を打てないことは、売り上げを伸ばすうえで致命的である。広告に代わるものとしては、新聞社や、雑誌を出している出版社、文芸評論家に新刊本を送り付け、書評欄に載せてもらうか、書店まわりの際、積んだ本に小さな立看板を立てさせてもらう程度がせいぜいというところ。売れなくても印刷代や紙代、原稿代ぐらいは回収しなければならない。そして原稿代も極力抑えめにする知恵が必要となる。

私は入社すると、映画の本（週刊誌の映画の欄をまとめたもの）と、戦前の著名な料理の本の復刻を企画した。その結果、料理の本は朝日新聞の家庭欄で紹介され、初版三千部を売り切ったが、映画の本は散々であった。税金対策のため、奥付の日付を刊行時より少し前にしたのが災いして、週刊誌の書評担当者から、掲載予定であったが後で奥付を見て中止したと言われてしまったのである。「日本映画の本は売れませんよ」とは、キネマ旬報社の編集者の言葉であったが、トーハンからの返品の山は、入口のドアを閉められない程であった。

やむをえず、『松本清張研究』第二号の清張作品の映画の座談会に出席をお願いした映画評論家の西村雄一郎氏に相談し、彼の主宰する地方の映画祭の会員向けに一千部を送り、無料でバラまいてもらった。この本は、故人となった映画評論家の荻昌弘氏が週刊誌に連載したものの中から日本映画の解説を集めたもので、私自身、若い頃この解説で映画を勉強させてもらったこともあり、今でも私の好きな本の一冊となっている。

――こういう状況の中で、研究誌『松本清張研究』は刊行の運びとなったのであった。

＊

冒頭に記したように、松本清張の死後、作品に対する評価は皆無で、研究誌など、どこの出版社も旗揚げする気配などなかった。このままでは、松本清張という作家の存在は、時間の流れの中で埋没してしまうのではないか――そんな思いが、私の心を横切った。とはいえ、こんな小さな出版社からこの偉大な作家の研究誌を出しては、この作家を傷つけることにはならないだろうか。――私はまんじりともしない気持ちであった。私の思いは、何とか松本清張という作家を、文学史上にその存在を知らしめることに尽きた。

私には、研究誌を創刊する上で一つの目標があった。私の卒論の対象でもあった宮沢賢治の研究誌である。私が宮沢賢治を研究していた昭和四十年代、賢治の研究者はきわめて少なかった。七十年代に入ってから、天沢退二郎氏や入沢康夫氏の賢治研究での活躍、そして両氏を中心とした筑摩書房の校本全集の刊行でにわかに注目され、以後多くの研究者を輩出したことは周知の通りである。

研究誌刊行にあたり、まず、『季刊現代史』の編集長藤井忠俊氏に連絡をすることにした。藤井氏の著書のうち岩波新書の『国防婦人会』は、刊行時に購入して愛読していた。戦中・戦後史をテーマにした『季刊現代史』の奥付に松本清張の名があることは、以前から気になっていた。そのことで、松本清張とのかかわりが深いと察したのだった。

電話をすると、まず奥さんが出た。藤井氏を呼んでくださいというと、どういうお話ですかと問われた。松本清張の研究誌を出したいので連絡させていただきましたと言うと、それはどういう内容ですかと問われ、話は清張の作品に及んでなかなか受話器を離す様子がない。かなり話が進んだ段階で、やっと藤井氏が出た。後でわかったことだが、この奥さんが、後述する藤井康栄氏であった。

文芸評論家の尾崎秀樹氏にも連絡すると、松本清張の研究誌である以上、遺族の協力が必要である、まずは松本家に挨拶をしなさいとのこと。早速、松本家に連絡すると、文藝春秋の藤井という編集者に相談してくださいと言われる。『昭和史発掘』の関係で藤井康栄という名前が出ていたことは知っていたが、「康栄」をどのように読むのか、男性なのか女性なのかわからない。文藝春秋に連絡をし、藤井コウエイ様はいらっしゃいますかと言うと、にべもなく、案内嬢は「わが社にそういう名前の人物はおりません」

と切られてしまった。

それでも、一ヵ月後にお会いすることができた。藤井康栄氏は三十年以上松本清張を担当された、女性の編集者であった（現・松本清張記念館館長）。その時のことはすでに記憶にないが、ただ夢中で清張作品について話したことは確かで、その後二度お会いし、「まあ、やってみなさい」という返事をいただいた。了承を得た時はうれしくて近くの公衆電話から会社に、興奮してたどたどしい声で電話したことを覚えている。

＊

『松本清張研究』の創刊号は、清張が芥川賞を受賞した作品『或る「小倉日記」伝』との関係から、「松本清張と森鷗外」を特集テーマにした。鷗外をテーマにすれば、近代文学の研究者もなじみやすいのではないかという意図があった。特集の論文の執筆者は、長谷川泉、田中実、小泉浩一郎、平岡敏夫氏らであった。

恩師の平岡敏夫先生には、『両像・森鷗外』論をお願いするため、連絡をとった。先生の懐かしい声が聴こえると受話器を持つ手が思わずふるえた。先生は授業はかなり厳しかったが、近代文学に対する一途な情熱は私たちの心をとらえた。若さあふれる壮士のように迫力のある授業は私たちを近代文学の世界に引きずり込むのだった。私の九州での教師時代は、その説明する口調さえ平岡調であったくらいである。平岡先生は、私が砂書房から記念館の研究誌の編集に移った折、創設された研究会の代表理事を引き受けて下さり、その後も清張関係の論文を多く執筆された。

創刊号から連載をお願いした一人に、藤井淑禎氏がいる。藤井氏は、研究誌刊行以前にすでに「二つの『天城越え』―純文学論争前夜―」（『立教大学日本文学』昭和六十三年七月。のちに「『天城越え』は『伊豆の踊子』をどう超えたか」と改稿され、松本清張記念館版『松本清張研究』創刊準備号と『清張　闘う作家』〈ミネルヴァ書房〉に収録）という、清張研究の先鞭をつけた本格的な研究論文を発表されており、大妻女子大学の今村忠純氏にそのことを教えられて立教大学の藤井研究室を訪ね、連載を依頼したという経緯があった。この論文は、清張文学がはたして現行の文学史や研究の俎上にのるものなのかどうかという私の悩みが杞憂に思えるほどのもので、川端康成の『伊豆の踊子』と松本清張の『天城越え』を細部にわたり比較したうえで、『天城越え』執筆は清張の、「純文学という砂上の楼閣にたてこもっていた作家たちへの挑戦であり、文学のあり方をめぐっての根本的な問題提起が、そこにはあった」と結論

づけていた。この論文を読むと、あたかも、自信に満ちた松本清張の肉声さえ聞こえてくるような錯覚を覚える。藤井氏は後に連載に新稿を加えて、平成十一年に文藝春秋から『清張ミステリーと昭和三十年代』（文春新書）を世に問うのであるが、私はこの論文を冒頭に掲載してほしかったと思っているくらいである。

やはり創刊号から連載で論文をお願いしている一人に郷原宏氏がいる。氏は文芸評論家のまえに、詩人でもあった。私は詩人郷原宏氏にあこがれたことがあった。カルチャーセンターで清張の作品を取り上げ講義されていることは、すでに私の耳に入っていた。文庫本の解説なども執筆されていることは、清張ファンなら誰でも知っているところである。郷原氏はその後、清張事典や清張論の単行本なども出された。

こうしてスタートした『松本清張研究』であったが、創刊号は、思惑をみごとに裏切って、部数を伸ばさなかった。書店まわりでは、売り場の主任も、たとえば新宿の紀伊国屋書店の本店などでも気を使ってくれ、本の置き場にも、新聞に取り上げられた記事を立看板に使ったり、工夫をしてくれたが、結果は惨敗で終わった。

そこで、純然たる研究誌から、もう少しファン層にも受けるような雑誌にしてはどうか、という意見が出た。それで表紙の文字も、〝松本清張〟を大きく、〝研究〟の文字は小さくしてみたり、また、内容的には、清張原作映画の対談に力を入れ、一般読者の取り込みに心を砕いた。

創刊号は、映画評論家の白井佳夫氏と撮影監督・川又昂氏との対談で、川又氏の手がけた清張映画全般――特に野村芳太郎監督の『砂の器』が中心となったが――について、興味深い話がうかがえた。第二号では、白井氏と西村雄一郎氏とで俳優大木実氏を囲んで、『張込み』についての座談会をおこなった。紙面は創刊号よりぐっと賑やかになった。西村氏は佐賀の旅館の息子さんで、『張込み』撮影の時、大木氏がその旅館に宿泊した縁もあって、話題は尽きなかった。

第三号では、『黒い画集・あるサラリーマンの証言』の名監督・堀川弘通氏の登場となった。堀川監督は、清張映画のシナリオを多く手掛けたシナリオライターの橋本忍氏とならんで、黒沢明監督との関わりも深い。第四号は、白井氏と巨匠新藤兼人監督との対談とした。新藤監督は、清張作品はテレビドラマのシナリオを多く手がけられていた。社会派でもあり、清張原作ではないが、松川事件の映画のシナリオも執筆されていて、『日本の黒い霧』などには大

変関心を持たれていた。私は、高校時代に「裸の島」を観て以来の新藤ファンで、実際にお会いしお話もうかがうことが出来て、編集の仕事をやって来てこの時ほど幸せを感じたことはなかった。

第五号では、御病気がまだ完全には癒えていない橋本忍氏に交渉し、何とか出ていただいた。白井氏との対談で、『張込み』、『ゼロの焦点』、『砂の器』などについての、貴重なお話を伺うことが出来た。今にして思えば、山田洋次監督に出ていただかなかったのは残念であったが、当時の私は寅さん映画をほとんど観ていなかったことでもあり、出席をお願いしたら、失礼になったかもしれなかった。

＊

砂書房版『松本清張研究』は創刊号から第五号まで刊行した。各号の特集のテーマとその執筆者は次の通りである（敬称略）。

創刊号「松本清張と森鷗外」（前述）〈平成八年九月〉
第二号「清張文学の〈宗教〉の意味」〈平成九年四月〉
山田有策、山折哲雄、権田萬治、与那覇恵子
第三号「『日本の黒い霧』—戦後史の風景」〈平成九年八月〉
尾崎秀樹、新藤兼人、中島誠、仲正昌樹、高良留美子
第四号「昭和30年代の清張文学」〈平成十年四月〉
藤井淑禎・川本三郎〈対談〉、飯島耕一、仲正昌樹、大橋毅彦、鈴木貞美、安間隆次、山田有策
第五号「松本清張と九州」〈平成十年八月〉
尾崎秀樹、小笠原賢二、西村雄一郎、山前譲、天沢退二郎、岡崎満義

〈特集以外の執筆者〉
今村忠純、阿刀田高、李徳純、中島河太郎、平井隆一、新城郁夫、渡辺諒、宮本忠長、岡田喜秋、村岡功、速川和男、森浩一、今村元市

〈連載論文〉
藤井淑禎、郷原宏、高橋新太郎

〈作品研究展望〉
安宅夏夫

〈作品目録〉
山前譲

第五号は、小倉の松本清張記念館設立の時期と重なり、記念館の特集となった。それにしても、この小さな出版社

が、当初は期待もあったが、結局赤字覚悟で、よく五号まで出せたものと思う。それは、会社の存亡にかかわることであった。

私は、社長の吉田三根氏が、そのためにどれ程苦労しているか肌で感じていた。いつも苦情らしきことも言わず、精いっぱい意地を張り、資金繰りに苦慮しつつ、常に最高の良心的な出版を心掛けられた姿勢には、頭の下がる思いである。しかし、さすがに私は給料をもらうことに耐え切れず、やむなく会社を辞することにした。

砂書房をやめた後、私は記念館の研究誌、記念館版『松本清張研究』の編集の仕事に就くことになった。記念館設立と同時に松本清張研究会を発足させることになり、恩師平岡敏夫先生を代表理事にお迎えし、藤井淑禎氏、山田有策氏に理事をお願いした。私は幹事という立場で協力した。私は、記念館の仕事からの収入は研究誌の編集費のみであったのに、研究会のためにもとびまわったりして、生活をかえりみなかったために、しだいににっちもさっちも行かなくなった。そのうち、私への雑音も聞かれるようになり、記念館の仕事は切り上げざるをえないところにまで来ていた。

記念館の仕事をやめた後に、約六年間の積もりに積った借金を前にして途方に暮れていた私に、平岡先生が「君、よくやったじゃないか」とねぎらいの言葉をかけてくださった。その一言で、私は、その後数年間にわたる苦しい借金生活を乗り切ることが出来たと思う。恩師とは、しみじみありがたいものである。

砂書房は、その後、優秀な編集者を迎え、社屋も瀟洒なビルに移り、もとの歯科系の出版社として発展し続けているようである。

（編集者）